

光陰似箭

北京から4年

(愛知大学) 三好 章

ロンドンでのオリンピックも終わった。ということは、開会前から物議を醸し、開催中にも話題に事欠かず、開催後も「鳥の巣」に関わった芸術家艾未未の処遇などをめぐり、いろいろな意味で尾を引いている北京オリンピックから、もう4年経ったということである。オリンピックの1年前、北京での生活の機会を持った者として、感慨深いものがある。

2007年、オリンピックを前にした北京では、至る所で「迎奧運」を呼びかけ、子どもたちにはテレビで「福娃」のアニメを連日放送し、十里堡「華堂商場」では「福娃」キャラのぬいぐるみや文具、おもちゃが所狭しと並んでいた。また、看板の「面(麵)食」の上に「Face Food」と「英語表示」を書いた王府井の小さな食堂が北京テレビのニュースでやり玉に挙げられ、早速撤去されたことも記憶している。これなどは、1964年の東京や1988年のソウルでも類似のことが見られたであろう。他人事ではない、苦笑いの記憶である。

その一方で、大通りから一步入ると、たとえそれが由緒ある胡同であったにせよ、古い家々には「拆」と大きな文字が丸囲みで書かれ、王府井でさえ、昨日夕飯を摂った店が、今日行ってみたら取り壊されて、跡形も無くなっていたことがちょくちょくあった。ところが、北京から離れると、オリンピックの入場券の地域別割り当てが少なかったせいなのか、テレビ放送以外に「迎奧運」を感じさせるものはほとんどなかった。

オリンピック終了後、日本からの北京観光では、バス車内からの「鳥の巣」見学が定番となっている。ところが、その「鳥の巣」の設計デザイナーの艾未未については、あまり芳しい話が伝わって

くることはない。中国の観光ガイドが艾未未に言及することはあり得ないだろうし、日本からのスルーガイドも同様だろう。艾未未自身は、オリンピックが政治プロパガンダにすぎないことに仕事に関わりながら気付き、開催前にオリンピックから手を引いたという。だが、本人のそうした思いに関わりなく、「鳥の巣」は北京オリンピックのシンボルとなって、「鳥の巣」をバックに、あるいは舞台に、張芸謀演出によるCGによる巨大な足跡を含む絢爛豪華な開会式が、世界中に放送された。いっぽう、艾未未はその後、表現の自由に関わる発言がもとで現在の政権に抑圧され、彼自身のブログも閉鎖されている。「鳥の巣」に関わって艾未未の名が肯定的に出されることは、現状でも、これからもないであろう。こうした状況は、いわずもがなであろうが、昨年の中国版新幹線追突事故や、今夏の北京豪雨をめぐる報道でも同様である。

これだけでは、いつものように言論の自由、表現の自由を抑圧する一党独裁政権、というお定まりのことを、これまた型どおりに述べているだけにすぎない。しかし、これらに加えて、やはり今夏であったが、江蘇省南通市啓東県で起きた民衆レベルでの抗議行動から、これまでとは異なるものが見えてくるように思えた。それは、1960～80年代の日本の東洋史研究に大きな影響を持った「民変」という視角なのだ。

「民変」は故田中正俊氏の著名な論文「民変・抗租・奴変」(筑摩書房『世界の歴史11』,1961年)で詳細に議論された。また同じ田中氏の執筆による『アジア歴史事典』(平凡社,1959年)の「民変」の項目には「中国における民衆の暴動の意であるが、歴史的には、反税闘争をはじめ、明末清初における都市の民衆を主体とする暴動」であり、その下部構造としての経済構造の変化と直接の原因としての政治腐敗があげられている(同前書437～438頁)。こうした議論や定義を見ると、21世紀

における啓東県の大衆行動が「民変」に当てはまるように見えて仕方がない。王子製紙の工場排水問題は、あくまでも火付け役であり、本当に汚染しているのかどうかは、騒ぎに加わっていった人々にはどうでもよいのではないだろうか。日本の一部報道では、啓東県の動きを環境問題に収斂させた記事があった。しかし、それは事象の表面をなぞっているだけで、ボールは前に向かっていても、ストライクになりようもないまとめ方である。そういえば、90年代末から今世紀初頭にかけて大陸中国で人気を博した大型歴史ドラマに『雍正王朝』があった。その中で失脚した高官の館を家宅搜索する時、官憲が「抄家」と叫んでいたが、これは文革期に紅衛兵が「実権派」党官僚の家を家捜しする時に使っていたのと同じ言葉であった。日中戦争期にも河北省の山間部の村で「減租減息」を共産党が行った時、農民には田租の「蠲免」と説明していた。これは、清末に蘇南の陶煦が減租論である「租覈」の中で使った小作料減免の表現と同じ言葉であった。共産党は、農民がわかる言葉で、農民の利益となるのだから我々を支持せよ、と訴えたのである。

中華人民共和国が成立したからといって、それ以前の言葉や習慣が一夜にして消え去るはずはない。しかし、時間をかけてでも、社会の仕組みや人と人との関係が変化すれば、言葉の意味するところや表現そのものも変わるはずである。現在の中国において起きているかも知れない大きな社会的地殻変動は、一体何なのだろうか。現在「民変」という言葉で啓東県の動きを説明しようとする動きはないし、当事者もそうは言っていないようである。しかし、あたかも、専制国家における「無告の民」が、本来の目的とは異なる事件にこと寄せて騒乱状態を醸成し、権力の末端に押し寄せる姿が、21世紀の長江河口地区に出現しているようである。一党独裁の専制国家が民の面倒を本当は見えていないのだ、ということに民が気付き始めた

のかも知れない。

そんなことを考えていた時、吉尾寛編『民衆反乱と中華世界』が汲古書院から刊行された。「新しい中国史像の構築に向けて」というサブタイトルが付されている。質の高い論文ばかりなので、どこかで必ず書評が出るだろうが、上述のような21世紀中国の社会状況を見ると、ほんの一部でも同書に言及しておくことは意味あることであろう。

佐藤公彦氏は、本書に収めた論文「民衆反乱と王朝交替の循環構造——元末以後の華北交界地区の宗教反乱を中心に——」のなかで、「秦漢帝国の成立以来、二千年、周期的に農民反乱と王朝交替が繰り返されたのは、あるパターン・モデルの繰り返しで、構造変化が乏しかったことの証左ではないか」(71頁)と述べる。すでに進歩史観自体が破綻し、何の魅力も感じられなくなっている現在であるとは言え、ここまではっきりと書かれると身も蓋もない。佐藤氏も指摘しているが、「進歩的」歴史学が批判してやまなかったのは中国史の見方としての循環史観であり、停滞史観である。究極の合理主義であるマルクス主義、史的唯物論は、予定調和の道を人類が歩んできたと主張する。全人類はその一本道を歩むべきであると要求する。初めに結論ありき、である。しかし、毛沢東を讃える「東方紅」は、マルクス主義が激しく非難しなくてはならない皇帝崇拜の臭気芬々のしろものである。

また濱島敦俊氏は「江南に“封建”有りしや? ——一九三〇年代上海郊区の地籍図から看る——」のなかで、文献とフィールドワークによって上海近郊農村が人民共和国成立前には自作農地帯となっていたことを実証した。さらに潘光旦と全慰天との共同著作とされてきた『蘇南土地改革訪問記』がどうやら潘の名を騙った中国共産党の出版物であることもあきらかにした。そしてそれらを通して濱島氏は「辿りついた結論は、『江南

に封建無し』ということに他ならない。毛沢東と中国共産党は、まこと、何と言う無駄な歴史時間を創出したのだろうか！」(175頁)とする。共産党が潘光旦の名を騙るようなことをした目的は江南に「封建」があったことを主張するためであり、そうでなければ共産党が掲げる自らの「マルクス主義」と異なる現実を認めざるを得ない。自分たちが打倒した社会は、悪しき「封建」的性格を色濃く持っていなければならなかったのである。要するに、自らの正当化のためには、史実をねじ曲げるくらいのことはするのである。著名人の名を騙るくらい、どうという事はなかったのであろう。院生の頃『蘇南土地改革訪問記』を真剣に読んで、土地改革の「必然性」を理解したと思い込んでいた身として、腹が立つやらあきれるやら。

その濱島氏が論文内で紹介し、強く推しているのが北村稔『中国は社会主義で幸せになったのか』(PHP新書, 2005年)である。初めから物議を醸すことを目的としたのではないかと思わせるタイトルである。しかし、中身は北村氏自身の大著『第一次国共合作の研究』(岩波書店, 1998年)の要約であり、史料に基づく史実の整理や議論の展開などは説得的である。主題は言うまでもなく、「中国は社会主義で幸せになっ」ておらず、現在の中華人民共和国は「社会主義の衣を着た封建王朝」(12頁)ということである。これだけなら、ただの薄っぺらなジャーナリズム的表現もどきである。しかし、繰り返しになるが根底に実証があり、きわめて説得的なのである。それに、北村氏は「社会主義の衣を着た封建王朝」という表現を同書でしているが、これも王小強が「農民与封建」(『歴史研究』1979年10期)で提起した農業社会主義論などを踏まえてのものであり、社会構造に従前からの変容がない中華人民共和国の成立は、王朝交替の一コマにすぎなかったというのが結論なのである(31~37頁)。

中華人民共和国成立に到る過程で、どれほど多

くの若者が共産主義の未来を夢見て生命を投げ出したのだろうか。共産党に期待を寄せた「無告の民」はどうなったのか。そして、中華人民共和国成立後の60年はなんだったのか。「広範な農民大衆」の圧倒的支持で権力の座について60年以上経つのに、いまだに、いまさらのように「三農問題」を提起しなくてはならないのはなぜなのだろうか。中国の長い歴史の中で、農民は利用されても、本当に顧みられることは絶えてなかった。歴代の王朝でも、初期の英邁な君主の「盛世」をすぎると、期待に応えてくれるかもしれないとの民の幻想は雲散霧消し、時に反乱を起こすことになった。20世紀中葉、民が新たな夢を毛沢東という「救いの星」に託したのが1949年であった。その後の歴史の展開はご覧の通りである。1920~30年代ソ連で展開されたプレオブラジェンスキーの「社会主義的原始的蓄積」「社会主義の自己搾取」なる、工業化のための農民収奪が、毛沢東の手によって大陸中国でも展開されたのだ。

ところで、最後にいまいちど。日本でも展覧会やパフォーマンスを行う現代中国美術家が近年増えている。1994年にすでに世田谷美術館で個展を開き、「ベネチア収租院」でも知られる蔡國強などは、その代表例であろう。艾未未の個展も、2009年に六本木の森美術館で開かれたことがある。埼玉大学の牧陽一氏が、個人のサイトで艾未未のウクライナでの個展や北京での様子を伝えている。艾未未の個展が一日も早く彼の住む北京で開かれることを期待する。